

Edgar Allan Poe

—その作品と生活—

重 松 卓 未

序 文

作家の考えている事がそのまま作品になる、逆にいえば作品が作家を示す—という考えは文学を愛する 善良なる 大衆の抱くはなほだしいドグマである。

作家の生活がそのまま彼の作品に表現されるという考えは極めて単純な故に、ともすればすぐれた批評家ですら共鳴させられる。

われわれは作家と作品とは同一のものであるという迷信を捨てねばならない。作品は造りあげられた瞬間に停止し、作者はその作品を出発点として貪欲なまでに、より高い次元を追求する。よしんば高い目標に向かっての活動を始めないにしても、より広い領域に向かう場合もある。

偉大な学者が—そして深遠な文学を創作した文士が童話の作家であって、同時に役人であったり、偉大なる喜劇作家がある日突如として偉大なる悲劇作家となり詩人となるという事実は、単純なる観念「作家と作品とは同一である」という事が如何に誤りであるかをはっきりと証明して余りあるものである。

われわれは第一に「作家と作品とはその表現においてまったく異なる」という事を認めねばならぬ。その大きな前提をふまえて次に「作家と作品とはその根底において共通するものがある」という事も認めねばならない。人間性というか、人間の弱点というか、ともかくその作家が抱いた思索の不連続とは別に、その作家の生きて行くための苦しみが存在した事実は否定出来ま

い。

Edgar Allan Poe は前述の大きな二つのテーマを私達に提供してくれる作家であるといっても過言ではあるまい。

I

「**Edgar Allan Poe** をいかに評価すべきか」というテーマが最近にいたって又やかましくなった。「又やかましくなった」という表現は、今更私がのべるまでもなく、彼が死んだ**1849**年に由来する。**1849**年という時点においてわれわれは **Poe** の事を考えざるをえない。

彼が偉大な新らしい詩の領域を発見したのか、それとも旧態依然たる英詩に反発したのか、一それは奇妙にも伝統ある英詩に媚びを売る結果にもなるのであるが—その肯定、否定の両論はあまりにもはげしく、中間にあって彼の詩・散文・批評等において彼の偉大さを認める論があまりにも少なすぎる。即ちあるグループにおいて彼の詩は天上のものであるが、又同時に反対のグループにおいてはそれは作品としては認めがたいしろものである。

この論争はいつまでも果てることなく、ついには **The Last Judgement** に致るまで続くかも知れぬ。いや続くかも知れぬではなく、最後の段階においても不明のままであるかも知れぬ。

そこで批評家達はいろいろな立場から彼の **evaluation** をきめようとした。筆者の耳に新たなものは **music** の面をかりての批評であった。「彼はワグネリズムをそのまま伝承したのであって旧態依然たる、しかもつまらない作家である。」

Poeが作りあげようとし又結局完成させたものは明らかに音の世界であるといっても差しつかえあるまい。*Annabel Lee* は勿論 *The Bells* において私達はそれを確認出来る。

ワグネリズムは一定の手法によって作られ一定の発表形式がある。換言すれば作曲以前に一つのルールがあり、それを聞くものは、すぐに「ああワグ

ナーだ」と安心させる効能があった。

Poe の作品の中にはワグナーの取った手法は認められない。*The Philosophy of Composition* の中で彼は彼独得の詩論を展開している。然しそれをもって彼の *The Raven* が規正されたと断ずるのは大きな誤である。むしろ *The Raven* があまりにも有名になったのでその解説をこころみたと考える方が妥当であろう。

彼が

Most writers—poets in especial—prefer having it understood that they compose by a species of fine frenzy—an ecstatic intuition and would positively shudder at letting the public take a peep behind the scenes, at the elaborate and vacillating crudities of thought...at the cautious selections and rejections—at the painful erasures and interpolations....

と作家共通の苦悩をいみじくも端的に表現しながら、自分自身について

For my own part, I have neither sympathy with the repugnance alluded to, nor, at any time the least difficulty in recalling to mind the progressive steps of any of my compositions....

と大見得をきっているが、現象的に見ても彼の自分の詩に加えた膨大な variants が彼の言葉とほうらはらの事実、即ち彼が非難した「多くの作家の創作過程」を彼自身が通った事を証明する。¹⁾

II

Poe の生涯について今更新らしくのべる必要は無い。彼の誕生・彼の死、彼の父母すべて不明である。その点について何ら authentic record は無いといっても過言では無い。Hervey Allen ; Arthur H. Quinn ; George Woodberry 等が著名であるがそのいずれもが信頼するに足らぬ。

Poe を理解 する上 でかくも 問題を複雑 にした 主因の 一つは彼の 伝記が Rufus Wilmot Griswold によって悪意を込めて書かれた事による。²⁾ 1850年に出版されたこの伝記がアメリカ及び英国における彼の **biography** を決定的なものとなった。

著名なる作家を賞賛するよりも虚実おりませて中傷する方が何かしら妥当性があるように思われる。それだけでなく Poe の不幸な誕生、不幸な死とその間に彼の創作した不吉な作品の数々と並べてみると、彼の人生が呪われた星のもとに始まり、常に暗黒であったと断定するレールが引かれてあったのである。Griswoldは正に人心の機微をついた。Rufus Wilmot Griswold (1815—1857) は編集者であり同時に Licensed Baptist Clergyman であったから彼自身にも Poe に対する偏見もあったであろうし、又その言葉をそのまま信じさせるという技術にも長じていたであろう。³⁾

この点についてはすでにわが国の Poe 研究家の指適する所であり、⁴⁾ その露骨さにはおそれいる始末であるが、又一面 Poe 自身も Griswold に宛てた手紙の中で支離滅裂のていたらくを示している事も否めまい。⁵⁾

III

Poe が *The Philosophy of Composition* の中で

When it mostly closely allies itself to Beauty: the death, then, of a beautiful woman is, unquestionably, the most poetical topic in the world—and equally is it beyond doubt that the lips best suited for such topic are those of a bereaved lover....

とのべている時われわれはすぐに彼の人生とむすびつけて考える。いわく初恋の Elmira Royster であり、彼の生母でもあり、初めて崇拜をこめたほのかなる恋心に変っていった Mrs. Sternard であり、彼の幼な妻 Virginia であり、彼女の死後彼をとりまいた多くの女流詩人達である。特に Mrs. Whitman はその中心と考えられよう。⁶⁾

然しそれが Poe にあ作品を書かせ、*The Philosophy of Composition* を書かせたすべてであると判断する事は絶対に認容しがたいものである。

Griswold の悪意にみちた彼の伝記に対し猛然たる反対があった。といえれば誰しも **Baudelaire** を考える。ボードレールこそ Poe の真の理解者であり、彼の努力がなかったら今日はたして Poe の作品の存在価値をみとめる者がいたであらうか、—それは疑問である。がボードレールがむきになって Poe は名門の系統であって彼の祖父は偉大なる軍人であり Poe の父 **David Poe** は将軍の息子であって... という解説はフランスのデカダニズムの代表的存在である彼にとってはまことにふさわしいが、それはどう考えても正確さを欠く一つの文学作品としかみなされまい。その伝記は実はフランスにおいては遠い新世界におけるロマンチックな作品としての価値しかないのではあるまいか。

伝記とか評伝とかは遠くはなれていけば、又時代が違っていけばいるほど、ロマンをかきたて、美しく、悲しく人の心を魅了するものといえよう。その点においてボードレールの Poe 評伝も **Griswold** のそれとは違った面において非難されるべきものかも知れない。けれどもボードレールのはたした役目はその欠点を補ってあまりあるものであり、**Griswold** のそれは非難されてしかるべきものである。**Editor** という立場と **Clergyman** という立場にあった **Griswold** が死者に対するあまりにも過酷なる暴論は世の識者をして眉をひそめさせたのも当然のことといわねばなるまい。

IV

Edgar Allan Poe がその生涯において接した女性は初恋の人 **Elmira** から始まって、妻 **Virginia** の死後をも加えて正におどろくべき数にのぼる。

Elmira に始まった彼の女性探訪は驚くべきものがあるが、といっても事の実情はまことに諸説紛紛としているのではあるが、最後の彼の手紙から、⁷⁾ いみじくも又初恋の人—今は未亡人となった **Mrs. Elmira Shelton** に終

ているのはあまりにうまく出来すぎているように思われる。その事が又彼の **Life** が小説よりも奇なりという印象を与える結果になる。彼の人生そのものが彼の最もすぐれた作品であるといえよう。

この事は否定出来ない事実であり、ここに彼の作品と彼の **Life** との相関関係が特にとりあげられる原因がある。

V

彼にとって女性は非現実的なものであり、決してそれをつかまえる事も、生きた存在として理解する事も出来なかった。

幼妻 **Virginia** は14才にして彼のもとに来るのである。この事実をつかまえて考えても **Poe** は女性という抽象体しか念頭になかったのであろう。女性とは遠く離れて、その美—彼における美の観念は一般的なものと極めて異っていたのであるが、その美の総合的な点を愛する事ではなく、分析しバラバラにし自己の主観を通じて造り直した幻の **image** に陶醉するのである。彼の作品の中にあられる女性は必ずそのプロセスを通らねばならないのである。

彼の作家としての最盛期は1845年と考えられる。1845年の詩集に乗った作品は **The Raven** を頂点とし若い時代に書きあげた多くの詩に手を加えて集められている。

それと時を同じくして1845年の“**Broadway Journal**”にのせられた **Berenice, Morella, Ligeia, Eleonora** という女性をテーマにした作品は彼が心魂をかたむけたという事実を証明する。

Berenice は1835年に“**Southern Literary Messenger**”に、**Morella** は同年少しおくれて同誌にのせられ、**Ligeia** は1838年“**Baltimore American Museum**”に発表され、**Eleonora** は1842年に発表されている。非常に短い期間の中に女性を取扱った著名な作品が出来たわけであるが、彼が26才の時から33才の期間の作品である事を思えば文学青年がその情熱のすべてを傾けつくした力作であろう。

特に *Berenice* においては「鋭い」換言すれば彼独特の「分解力」があまりにも強く、ベレニスという女性はただ影の如き存在である。

... Ah! vividly is her image before me now, as in the early days of her light-heartedness and joy! Oh! gorgeous yet fantastic beauty! Oh! nymph amid the shrubberies of Arnheim! — Oh! Naiad among its fountains!

とのみしか表現されていない。Poe がこの作品の中で表現したのは attentive と呼ばれる特種な monomania におそわれた主人公であり、その主人公即ち Poe が示す態度が彼の全作品に及ぶ彼の手法を示すのである。この *Berenice* の冒頭において彼は自己の世界を飾る色彩というものをはっきり示し、次に分解し、そのバラバラになった要素を如何にして story にまとめるかという二つの決定的な Key を示している。

Berenice の理解なくしては彼の作家精神の理解は不可能である。この作品の理解なくして *The Raven* の理解なく更に *The Philosophy of Composition* の理解はあり得ない。

Berenice は徹底的に分解され、バラバラになった要素が時にふれて描写され読者の imagination に幻影を与える。*Berenice* は影の如く描かれ、その実在は無い。その実在は読者の心の中に想像されるだけである。そして彼女は死に、その白い歯のみが物語の最後をしめくくる。

この「白」の持つ恐怖を理解する事なくしては *Black Cat* に示された「黒」の持つそれと *The Masque of the Red Death* の持つ「赤」のそれとは了解し得ないのではなからうか。この作品の冒頭に次の如く示されている

... Misery is manifold. The wretchedness of earth is multiform. Overreaching the wide horizon as the rainbow, its hues are as various as the hues of that arch... Overreaching the wide horizon as the rainbow!

The hues of the rainbow という表現の中に彼の色彩感覚がある。虹は

いろいろな色を持つ、が統一され総合された時それは白である。逆にいえば白の分解によってさまざまな色が表現される。すべての色を総合して虹が生まれその総合である虹が不幸のシンボルである。

Ligeia と *Mollera* とは同一の観点からえがかれたものであって *Ligeia* の方により努力を傾けたあとが見られる。そこには *Berenice* に見られなかった肉体が存在する。

Ligeia は *Berenice* における手法を十分に反省し彼としては珍らしくデリケートな描写をしている。*Ligeia* はその声、その容貌、その動き、その思想すべてにわたって作品で示されている。逆にいえば読者の *imagination* に訴える点が欠けているともいえよう。然しながら *Poe* が女性の肉体について執拗なまでに描写したという点において、彼の筆の動きというか、文筆世界における自信というようなものがうかがえる。然し彼の作品を並べてみて *Ligeia* ほど評価の分れるものもあるまい。一般的、大衆にアピールする面ではこの女性が決定版であろうが、その創作態度において *Poe* が筆におぼれたという事は否定出来ない。

Poe の作家精神に読者の存在を無視するという面が1838年に一即ち彼が29才の時に存在したとっては過言かも知れぬが、次の段階にふみ出す一步手前であったといってもよからう。

即ち1839年にいたって *The Fall of the House of Usher* と *William Wilson* が発表され彼の文壇における位置の確立にいたる一つのプロセスとも考えられよう。然し *Eleonora* は違う。それは前の作品とまったく異なるものである。同じ女性をテーマにしたという点では同一のカテゴリーに入れられるが1842年という年はあらゆる面で彼の人生観、作者態度をかえさせた。

“*Death of Beauty*” が観念でなく一つの現実となったのである。彼の妻 *Virginia* がその年の初めに歌いながら血を吐いたのである。33才の彼はその現実と直面せねばならなかった。彼の生活、作品における *fancy* はこの時点において停止せざるを得なかった。その後約5年間死と直面する妻 *Virginia* をかかえた彼は *reality*—あまりにも冷たい現実と直面せざるを得な

った。

1845年の詩集及び各種の雑誌に決定的に示された現実と理想のたたかいは1842年の初めから始まった。その間における彼の生活のための苦悩はあまりにもあわれである。1847年彼が38才の時 Virginia は死亡する。それはあまりにも悲しい事実であるが Poe の人生観をかえる転機ともいえよう。彼にとって幻想の世界であった彼の作品が妻の死をはさんで現実の世界となる。Annabel Lee はいろいろな要素を含んでいるにせよ、やはり彼の妻であった Virginia に対してささげられた作品であろう。

妻の死後いろいろな面で女流詩人と浮名をながした彼ではあるが、それは彼の絶望感を消すための手段である。

Mrs. Whitman との件も、初恋の人 Mrs. Shelton との事もすべて彼自身がいだいていた絶望に由来する。どうしよにも自己自身が統御し得ない虚無感が永遠なる安定を否定したとしか感じられない。

結 論

人は幸福な時に偉大なる仕事をし、不幸な時、逆境においては絶望してしまふ一即ち灰色の塀で四面をとりかこまれている時には偉大な作品が生じないという事はまったくの誤である。

不幸のどん底においてこそ偉大な作品が出来るという不思議な作家がいる。その点を私は序論において指適した。作家の状態と作品とは別にして考えねばならない。幸福なる環境ですぐれた作品をあらわす作家もあろうし、その逆に不幸な状態でなければすばらしい作品を表現出来ない者もある。作家と作品とは根底においてつながっているけれども、絶対に同一である事はない。

Poe の作品、その生活を考える時に若くして死んだ Virginia をすぐ考えるが、彼女の母、つまり彼の義母である Mrs. Clemm の事を忘れてはなるまい。

わずか14才の娘を Poe の妻としたこの夫人は何を考え何を実践したのであろう。しかも Mrs. Clemm の及ぼしたと考えられる点は彼の作品の中に容易に発見出来ない。

彼が1849年の秋に Mrs. Clemm によせた手紙を読むと結局彼がすべてをうちあける事が出来たのはこの義母 Mrs. Clemm であるという事が判明する。Mrs. Clemm —彼女の娘が Poe にとついだために貧困の中に死んで行ったというまことしやかな評伝が真実であれば、彼女と Poe とはこの手紙にしるされたような関係であり得ないのではあるまいか。その手紙の中で次の妻のことを一即ち初恋の人 Elmira の事をはっきりと示し、Elmira 自身の言葉さえ書いている事は、彼が最後にたよれたのは Mrs. Clemm 以外の何物でもないと断定してもよからう。

Mrs. Clemm についてはやはり Wagenknecht の説く通り、男性的な気性をそなえた大柄の人であり widow's cap をかぶった、それほど文学には興味はないが、Poe の口述をノートし得る女性という印象は正しかろう。

極言すれば Poe が女性を肉体的に愛した事はなかったと考えてもいい。Mrs. Richmond に対する気持も、彼がその筆にまかせた表現であろう。Mrs. Whitman との婚約を破らざるを得なかった Poe、そして初恋の人でありもっとも安定した生活を得られるはずの Mrs. Shelton との婚約もほとんど自殺に近い死によって逃避した Poe を考えると、Poe は physical な女性を愛する事が出来ず、影のような女性しか愛する事は出来なかったであろう。

Poe はある時点においてその発達を忘れた子供であろう。彼の作品の背後にひそむ彼自身はある面において理想をのべ又一面彼の実行し得ない理想を詩・散文に表現した作家であろう。この定義はいかなる作家についてもいえよう。作家と作品とは異なるものであると。

- 1) Cf. *The Poems of Edgar Allan Poe*, ed. by Stoval (Virginia U. Press 1965) pp. 146—355.
- 2) Cf. Edward Wagenknecht : *Edgar Allan Poe* (New York, Oxford U. Press 1963) p. 9.
- 3) Cf. *The Letters of Edgar Allan Poe*, edited by John Ward Ostrom (New York, Gordian Press 1966) p. 160.
Griswold(ed.) : *Poets & Poetry of America Prose Writers of American and Female Poets of America*.
以後彼の書簡についてはこの本を引用する。
- 4) Cf. 島田謹二 : 「ポーとボードレール比較文学史研究」昭和23年, イブニングスター。
- 5) op. cit. *His Letter to Griswold* (New York, May (?), 1849).
...but, in one of your editions, you have given my sister's age instead of mine. I was born Dec. 1813—my sister Jan. 1811....”
- 6) op. cit. ③ His letter to Sarah Helen Whitman (New York, December 1848)
④ His letter to Maria Clemm (Providence, December 23 '48)
“...We shall be married on Monday, and will be at Fordam on Tuesday, on the first train.”
- 7) op. cit. His letter to Maria Clemm (Richmond, Tuesday Sep. 18 '49)
“... Elmira has just got home.... I think she loves me more devotedly than any one I ever known.... If possible I will get married before I start....”
- 8) op. cit. *Edgar Allan Poe*, pp. 190—193.